

論文要旨

学位論文題目： One Teacher's Exploration of Integrative Approaches to Teaching English in the Japanese Context: An Autoethnographic Study

(日本の英語教育における統合型指導の可能性：ある教師の自己エスノグラフィーによる考察)

氏名： シーハン小田早苗 (Sanae Oda-Sheehan)

日本の EFL (English as a Foreign Language) 英語教育においては、その効果性の妨げとなるいくつかの溝が存在すると考えられる。その例として、学校教育で主に教えられることと実社会でのコミュニケーションで必要とされることの乖離、語用論分野の指導における理論と実践の分断、また教室における文法重視型指導とコミュニケーション重視型指導(CLT)のジレンマなどがあげられる。本研究の主たる目的は、そのような溝を埋めるためにより連続性のある英語教育の可能性を探究し、その経験を他者と共有することにより、統合型指導実現に向け自己および他者の省察を促すことにある。

語用論とは、さまざまな社会文化的状況において対話者が何を意図・理解し、いかに対話を構築するかを研究する分野であり、コミュニケーションを水面下で支える重要な要素であるが、英語教育での取り組みはいまだ乏しい。いっぽう、多くの教師がコミュニケーション重視型指導(CLT)の重要性を感じながらも試験対策・文法指導との両立に苦慮し、CLT の実践促進が阻まれている。そのような現状を鑑み、筆者は、文法指導との統合により語用論的指導への取り組みを促し、CLT 実践につなげる統合型指導 (*the Pedagogical Trinity: 三位一体型アプローチ*) を提案し、その実現のために教師にとって重要となる要因について考察した。

研究方法としては、教育領域においても近年注目されつつある自己エスノグラフィーの手法を用い、研究者が自身の経験を対象化し再帰的に振り返ることにより、当事者の視点を通して複雑な事象を解明するという質的研究アプローチを採用した。自己(研究者)と他者(読み手)との相互行為およびその社会文化的背景の理解を目的とする自己エスノグラフィーにおいては、研究者の自己省察から知見を得るだけでなく、語られる事象を他者が自らの経験と照らし合わせながら省察するというつながりを通し、応用的可能性が検討できる。また、個人の経験を語るというスタイルを通し、学術的に複雑な事象がより広範な読み手に伝わりやすくなり、学術研究と社会のつながり (*academia* と *life* の接点) を生み出すことができる。研究者が自己の記憶に頼る自己エスノグラフィーは主観的で信頼性に欠けるとの批判もあるが、その批判に応える形で発展した分析的自己エスノグラフィーのアプローチを採用することにより、近年海外では英語教育分野でも自己エスノグラフィーによる研究が進んでいる。本研究においても、この分析的自己エスノグラフィーの立場からデータを質的に分析しつつ、個人的な経験を深く掘り下げた解釈により他者に同様の気づきをもたらすことをねらいとした。

具体的な研究手順としては、筆者と共通の実践コミュニティ（Community of Practice: CoP）に属する調査協力者 12 名に半構造化面接を実施し、その対話に反映される筆者自身の認知と実践についてのデータを質的に分析した。さらに、9 ヶ月間におよび記録された筆者自身の授業実践ジャーナルの記述を分析することにより、自らの経験に基づいたデータの多面的な解釈により統合型指導実現のための要因を探究した。

その結果、教師が学習者、研究者、親、ビジネスパーソン等のさまざまな社会的アイデンティティを有し、そのアイデンティティの存在を自ら意識するとともに、それらのアイデンティティに基づいた多面的な視点および長期的ビジョンを持つことが統合型指導実現のための重要な助けになると判明した。またその過程において、CoP のメンバーが持続的な協働作用を通し互いにサポートし合うことの意義が確認された。さらに、学校教育と社会のつながりをはじめとする様々な連続性を体現化するために、教師が自己省察を通し、実践の根拠となる自らの信念や価値観を認識し、継続的な改善に努めることの重要性が明らかになった。また、教室における統合型指導の実践においては、語用論・文法・コミュニケーションの指導を暗示的に統合するのではなく、統合しながらもそれぞれの要素を独立的に認識しつつ明示的な指導を行うことにより、生徒に対し学習のねらいを明確化することが重要であると推察された。

この研究による知見は、あくまでも自己エスノグラフィーによる考察で得られた 1 つの可能性に過ぎない。しかし自己エスノグラフィーにおいては、主観性を認めつつ社会科学的側面を強調することにより、自らの経験に基づいた深い分析・解釈とともに信頼性の担保が可能となる。本研究のような自己エスノグラフィーによる考察は、自己と他者とのつながりを通し、同様の問題と対峙している他者に応用的可能性の示唆を与えるだけでなく、他者自身の省察を通し、提示された問題に関する対話の場を提供する側面も備え持つ。本研究により、統合型指導に向けた協働的探究のためのオープンな対話の重要性が示唆されたとともに、そのような協働的探究を促す自己エスノグラフィー研究の可能性が確認できたと見えよう。